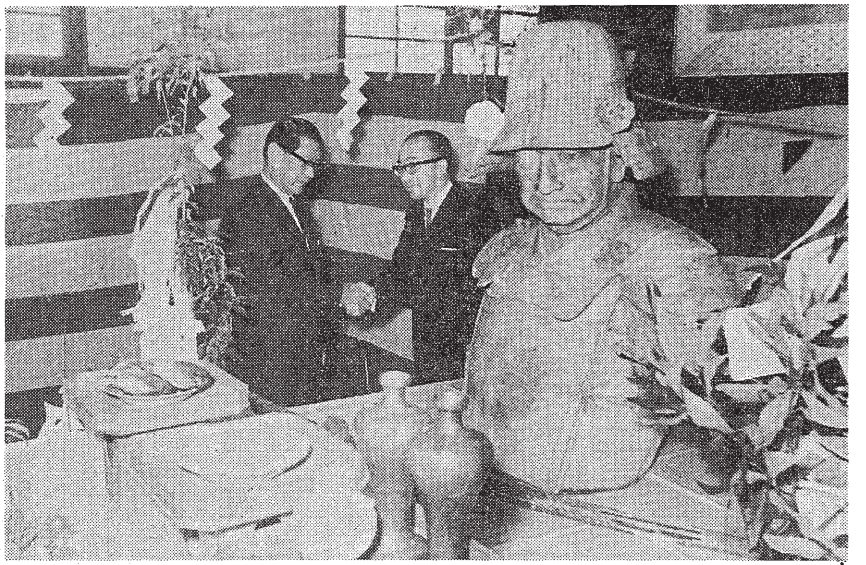

騎馬像の原型が柴田町で見つかり、仙台市へ貸し出された。調印式で握手する平間新午郎町長㊧（当時）と小岩忠一郎仙台市助役（同）

政宗騎馬像余話

小室 達・日記から

▷12

「木に竹を接（つ）ぐ」の例えがある。小室は「あの台座は騎馬像に合うように造った。他の像は似合わないと批評したというが、その真偽はともかくとして確かに騎馬像の台座に平服姿の立像は、不釣り合いだったようだ。

昭和三十年代の半ばに入ると、市民の生活にもゆとりが見られるようになった。市民の間にかつての騎馬像を懐かしむ声が高まり、復元の動きが出てきた。企業が寄贈した平服像と、県内の青年団の汗と誠意の結晶である騎馬像とでは愛着の度合いが違ったのだろう。供出で撤去されてから二十年後、三十九年十月にやっと、騎馬像は天守台に戻って来た。

「私が三十五年に助役になって間もなく、昔の騎馬像は良かったなあという話が起きて、復元することになった。しかし写真でも見て復元するのか、どうしようかと心配していたら、柴田に原型があるという話を聞いた。小躍りしましたね」。当時、仙台市助役だった小岩忠一郎さんㇾもの思い出である。

原型は小室の死から一年後、静子未亡人から郷土の槻木町（現柴田町）に寄贈されていたのだ。いつの日か復元されるのを期待していたのだろう。東京の小室家が空襲の被害をさほど受けず、寄贈を受けた町役場も幸いした。

武藤幸夫柴田町コミュニティーセンター館長㊧も「案外、大切な物だと感じないで、大事に扱わなかったんでしょうね。町の幹部も強い関心を持たなかったんでしょう」と回想する。

騎馬像お国入りのお祭り騒ぎは遠い昔のこととなり、彫刻家小室の名も次第に忘れられつつあったところ

20年ぶりの復元

のエピソードであろう。

こうして柴田町で見つかった騎馬像の原型は三十九年三月五日、同町役場槻木庁舎で引き渡し調印式と貸し出し祈念式が行われた後、東京に送られ、創建時と同じ伊藤和助氏によって鋳造された。予算総額千七百五十万円。最初の像のざっと四百倍もかかった。

「槻木の役場庁舎の階段を上っていくと、裏天井があいているのが見えた。ガラクタらしい物があるので職員に尋ねたら政宗騎馬像の〝型枠〟だという。こんな大事な物を天井裏にぶら込んでいるのか、とびっくりした」平野町長にはそんな思い出がある。

無事だった原型

平服像は、岩出山町観光協会に無償譲与され、今は、若き日の政宗が忍従の日々を過ごした岩出山城跡に建てられている。

◇

新しい騎馬像の除幕式は三十九年十月九日、東京オリンピック開会式の前日に行われた。三十年前のような〝大名行列〟もお祭り騒ぎもなかったが、オリンピックの祭典ムードが新しい銅像をも祝福したことだろう。この日の河北新報夕刊は除幕式の模様を次のように伝えている。

―実に二十年ぶり。秋深まる仙台城跡天守台にさっそうと馬にまたがったかつての政宗公騎馬像がくっきりと浮かび上がった…。

◇

亡き父に代わって出席した小室猿嗣さんㇾはその日の感激を今もはっきりと覚えている。

「おやじは芸術家ですから作品が残っていなければどうにもならない。ダメだろうと思っていた一番代表的な作品が残ったんですから、おやじも喜んで胸をなで下ろしたんではないでしょうか。何しろあの像にはおやじの魂がこもっているでしょうから。早く死んじゃったけども、ああいう作品を残せたんですから、幸せな一生だったのかもしれません」

みやぎ路

河北新報　昭和62年(1987年)5月20日掲載